ISSN 1880-0394

Annual Bulletin Report 2016

東海大学文明研究所所報 2016

巻頭言

文明研究所の2016年度の運営について

山本和重
文明研究所所長
文学部歴史学科日本史専攻･教授

2016年度から、文明研究所の所長を担当することになりました。2001年に旧文明研究所、社会科学研究所、芸術研究所が統合して新文明研究所となる以前の、社会科学研究所の所員を1993年度から1997年度まで５年間務めたことはありましたが、旧文明研究所や新文明研究所の運営や共同研究に携わった経験はありません。沓沢宣賢前所長のご助言を仰ぎながら、おっかなびっくり、研究所の運営に取り組んでいます。

他方で、本学では、2016年４月に総合社会科学研究所が設置されたため、文明研究所が果たすべき役割にも、若干の変更が生じました。研究所の目的である、「人類の営為の総体としての文明をその主体である「人間」とその具体相である「生活」を主軸として、学際的・総合的見地から探求し、その成果を調和のとれた文明社会の創造に資すること」（研究所規程第２条）に変わりはありませんが、研究活動については人文学を中心として展開していくことになりました。

しかし残念ながら、その人文学は、近年、社会的評価が著しく低下している研究領域といわざるを得ません。2015年6月には文科省から、国立大学の人文・社会系学部について「社会的要請の高い分野への転換」を求める通知が出され、各方面からの批判により「火消し」に動く事態がありました。文科省の通達はともかく、人文学の活性化をどのように進めるかが、大きな課題となっています。そのため、本年度の研究所のプロジェクトの第１の柱を、人文学の活性化のための研究活動としました。前年度発行の『文明』第20号の巻頭言「文明研究に求められるもの」で、文学部ヨーロッパ文明学科の平野葉一教授（本研究所所員）は、各学問分野のdisciplineとしての確立が、逆に人間の営為そのものとの関係を希薄化させている状況を指摘し、「複眼的視野と個々のdisciplineの綜合の可能性を探ること」の必要性を提唱しています。そして、そうした問題関心に基づき、すでに2015年度から「超領域人文学（Trans-Disciplinary　Humanities）構築に向けた基礎研究」を開始し、国際シンポジウムの開催など積極的に学際的また国際的研究活動を展開され、本年度もそのプログラムを継続しています。また本年度からは、私が責任者となって、歴史的観点から人文学の方法論を見直し、その活性化をはかるための研究プロジェクトとして「20世紀人文学の方法論的再検討」を立ち上げました。第１回の研究会では、私が報告を担当し、歴史学の分野から方法論の検討をおこないました。その準備の過程で印象的だったのは、現代歴史学の方法として浮上している身体性や感性の重視は、20世紀の早い段階から登場していること、また現代思想、例えばフッサールの現象学と共鳴するところがあることでした。他の分野からの報告をいただきながら、また平野教授のプロジェクトと協力して、人文学の活性化のための発信を行っていきたいと思います。

2016年度の研究プロジェクトのもう一つの柱は、本学が所蔵する文化財の保存・整理、研究、活用に関わるプロジェクトです。本学は、対外的に誇れる、貴重な文化財を多数保管しており、考古学の分野では文学部の考古学研究室で保管している古代エジプト及び中近東コレクションや、文明研究所が保管しているアンデス・コレクションがあります。エジプトコレクションについては、2015年に横浜ユーラシア館で「古代エジプト　ファラオと民の歴史」展覧会を行って好評を博し、またアンデス・コレクションについては、付属図書館展示室で企画展示などを行っております。「文明遺産をめぐる課題２」、「東海大学所蔵古代エジプト及び中近東コレクション（AENET）の公開に向けての基盤整備」は、こうしたコレクションの保管・整理、研究、活用に関するプロジェクトです。とくにこの間、課題となっているのが、これらの貴重な文化財を常設展示できる博物館がないなかで、その存在を社会的にどのように発信していくかということです。古代エジプト及び中近東コレクションについては、AENETオンライカタログが東海大学文学部のHP上で公開されておりますが、こうした方向をいっそう推進していきたいと考えています。ご支援をお願いいたします。

文明研究所の研究プログラム

文明研究所は、本学の創立者松前重義博士の意思を受け継ぎ、学内の幅広い分野からの研究者を結集して、過去の文明、現代文明が抱える問題、これからの文明のあり方について総合的に研究する機関です。

当研究所の発足は1959年に遡りますが、2001年の新文明研究所の設立後は、「21世紀文明の創出」という研究テーマのもと、おおよそ３年を１期とする研究プロジェクトを策定し研究を推進してきました。第１期「現代文明の展開と社会文化的多様性」（2001年度～2004年度）においては現代文明の多様性を指摘し、第２期「グローバリゼーションと生活世界の変容に関する総合的研究」(2005年度～2007年度)においては地域研究と国際的な研究連携を進めながら、グローバリゼーションの持つ意味を人間の生活変化という観点から捉え研究を行いました。第３期「対話と共生を理念とする新しい社会の構築」(2008年度～2010年度)においては対話と共生の観点から21世紀文明のあり方に対する提言を目指し、第４期「創造すべき21世紀文明」（2011年度～2013年度）においては第３期から打ち出した「対話と共生を理念とする新しい社会の構築」をさらに進めてきました。

2014年度から当研究所では、本学の第Ⅱ期の中期目標（2014年度―2018年度）を受けて「文明とグローバリゼーション」をテーマとして掲げました。この間、コア・プロジェクトとして「アイデンティティの多様性と共生」、「グローバリゼーション下での社会システムの変容と再構築」、「震災復興と文明」、「文明遺産をめぐる課題」、「超領域人文学（Trans-Disciplinary　Humanities）構築に向けた基礎研究」の５つのプロジェクトを実施してきました。

2016年４月の総合社会科学研究所の設置に伴い、文明研究所の研究活動は人文学を中心に進めていくことになり、プロジェクトについても再編成を行い、「超領域人文学（Trans-Disciplinary　Humanities）構築に向けた基礎研究」、「20世紀人文学の方法論的再検討」、「文明遺産をめぐる課題２」、「東海大学所蔵古代エジプト及び中近東コレクション（AENET）の公開に向けての基盤整備」の４つのプロジェクトを推進しています。これらのプロジェクトにより、21世紀に継承・展開すべき人文学の構築と、本学が所蔵する文明遺産の整備・研究・活用をはかるとともに、国際シンポジウムの開催など、国際的な研究連携を推進していきます。

2016年度の研究プロジェクト

「超領域人文学（Trans-Disciplinary Humanities）構築に向けた基礎研究」

（コア･プロジェクト1）

平野葉一・沓澤宣賢・田中彰吾・吉田欣吾
中澤達哉・服部泰・中村朋子・鷹取 勇希

本プロジェクトでは、2015年度の研究を継続的に発展させ、文明研究の一つの手法としての超領域人文学構築について検討した。とくに2016年度は文明が個々の時代、地域における人間存在の意味と人間営為によって形成されるという視点のもとで、それらを理解するために各学問領域の総合としての超領域人文学の在り方について検討した。具体的には、東海大学大学院の文学研究科文明研究専攻の修了生および大学院生を含めて、毎月定期的な研究会を開催し、例えばルネサンスの知の捉え方、19世紀以降の専門分化と総合的教養の関わりなどをテーマに検討した。これらの成果を、2017年年３月3日・４日にヨーロッパ学術センター（デンマーク）で開催された国際シンポジウム「第2回日欧間の文明対話」にて発表した（ヨーロッパ学術センター、オールボー大学（デンマーク）との共催）。東海大学からはコア･プロジェクトメンバー8名（大学院生を含む）が参加した。また、本研究の一環として、年度内で行われた二つのワークショップ（言語教育、文化心理学）に後援の形で参加した。2016年度はEUのERASMUS+プログラムへの参加を試みたが不首尾に終わったが、2016年度の研究をもとに今後も引き続きヨーロッパとの共同研究を画策したい。

「20世紀人文学の方法論的再検討」

（コア・プロジェクト２）

山本和重・田尻祐一郎・馬場弘臣・篠原聰
斉藤仁一朗

本プロジェクトは、2016年度から文明研究所が人文学を中心に研究活動を展開することになったことを受けて、新規に立ち上げた研究プロジェクトである。

本プロジェクトは、人文学に対する社会的評価が低下するなかで、その活性化のために、20世紀人文学の方法論を歴史的な視点からふりかえり、21世紀に継承すべき方法をさぐることを目的としている。その問題関心の背景にあるのは、19世紀的な工業化型近代化や技術万能主義に照応した科学主義的人文学に対して、20世紀には、哲学、歴史学、民俗学、教育学など、さまざまな領域から反省と新たな方法論が提示されてきたが、それらの成果が必ずしも今日の人文学に継承されておらず、そのことが人文学における方向性の喪失状況、ひいては人文学に対する社会的評価の低下とつながっているのではないかという認識である。こうした認識の可否を含めて、学問領域を超えた共同討議によって、人文学の可能性を探ろうとするものである。

本年度は、研究会を下記のように３回開催した。

第１回（2016年9月１日）：山本和重「20世紀人文学の方法論的再検討－日本史学の分野から郷土史研究、国民的歴史学運動、社会史研究を題材に－」（『文明』第21号に「20世紀人文学の方法論的再検討のための試論－歴史家黒羽清隆を手がかりとして－」と改題して掲載）

第２回（2016年12月21日）：斉藤仁一朗「教育学研究に関する研究方法論の動向の紹介・検討―カリキュラム研究を中心に―」

第３回（2017年２月21日）：村田憲郎「ベンヤミン『物語作者』を読む」

次年度は、学外からも講師を招聘するとともに、研究交流の成果を社会に発信するためのシンポジウムの準備を進めたい。

「文明遺産をめぐる課題２」

（コア・プロジェクト３）

横山玲子・松本亮三・加藤泰
山花京子・吉田晃章

本プロジェクトは、2014・2015年度に実施した「文明遺産をめぐる課題」を継続するものであり、1）東海大学所蔵の考古学遺物（古代アンデスおよび古代エジプト）を利用した企画展示と、2）文明理論研究の２つを主な課題としている。

1）については、平成28年度平塚市民・大学交流事業「考古学の世界」において、吉田晃章講師による「アンデス文明と土の象形　収蔵品に見る先住民の世界観」（10月8日）と、山花京子准教授による「東海大学所蔵　古代エジプトコレクション」（10月15日）を、プロジェクト協賛事業として実施した。この企画は、展示と講演とにより、コレクションへの理解と考古学への関心を喚起する目的で開催されたものである。

また古代アンデス・コレクションについては、吉田講師が工学部電気電子工学科の「入門ゼミナール２」の授業のなかで、リベラルアーツ教育の一環として「コレクションを通して学ぶアンデス文明」と題して講義を行っている。2）文明理論研究については、現代文明のなかで生きる我々自身が、後世に何を

残すのかという課題について討論を行うことを目的としている。東海大学が建学以来目指してきた文明学をふまえて、地球環境破壊や人間疎外、アイデンティティーの喪失、テロリズム等、現代的諸問題を、根源的に検討しようとするものであり、今年度は「文明学ラウンドテーブル」を２度開催し、専門領域をこえた議論を行った。第１回は６月28日に開催し、加藤泰教授がこれまでの文明研究所における研究活動を総括し、今後の具体的な討論内容に関する検討を行った。第２回は、2017年３月１日に開催し、松本亮三教授が、生態系に含まれる文明という視点から、生命を超えた生成と循環について問題提起を行い、文明そのものを考究するために新たに必要な思考の枠組みについて討論を行った。

「東海大学所蔵古代エジプト及び中近東コレクション(AENET)の公開に向けての基盤整備」（コア・プロジェクト４）

山花京子

本プロジェクトは本学所蔵AENETコレクションの整理・修復・保管・活用に関する基盤を構築するための活動で、最終目的は所蔵コレクションを整備し、外部に公開できるように体制を整えることである。現状として学内にはコレクションを展示できる博物館がないため、インターネット上に博物館を作り全世界の人々が本学の収蔵品データを閲覧できるようにすることが当面の目的である。

これまでも総合研究機構プロジェクトや学部等教育研究補助金を利用してAENETが所蔵する約6000点の考古学資料、約15000点の写真資料などを整理し、台帳に記録し、そのデータをHPにアップする作業を行ってきたが、完成には程遠い現状である。この作業を継続して行い、早期に完成をさせるため、2016年度からは文明研究所のプロジェクトとして遺物約6000点の遺物を非公開の遺物台帳に登録し、公開用のオンラインカタログに入力し、アップロードする作業を8月より進めている。本年度は紀元前～ローマ帝政期のコイン資料と金属製農具や武器などを台帳に記録し、アップロードしている。アップロードされた情報は下記から閲覧することができる。

日本語　http://aenet.pr.tokai.ac.jp/
英語　http://aenet.pr.tokai.ac.jp/english.php

また、遺物の注記、スケッチなどの登録情報の記載も200点近く行った。そして、その台帳作成の前段階として、収蔵室に収納されている遺物の注記、スケッチ、記録写真などの基礎的情報の整備も行っている。

収蔵室内は年間を通じて湿度約45%、温度約23℃に設定されている。遺物は中性紙保存箱やテンバコに入れて棚に保管しており、簡易ではあるが地震対策のためのロープ柵も各棚に設置した。外界からの菌やコンタミネーションの流入を避けるため、収蔵室は土足厳禁とし、入り口で下足をスリッパへと履き替えて入室するようにした。

さらに、収蔵室内にて検出された害虫を駆除するために忌避剤を設置し継続してモニタリングを行っているが、教室を転用して収蔵室としているため密封された空間にはなっておらず、小さな昆虫の出入りを防ぐことは難しいのが現状である。来期には遮蔽材を設置することを検討している。

活動報告

国際交流
「文化心理学ワークショップ」（2016年7月23日）

文明研究所では、2015年11月13日、14日に、デンマーク・コペンハーゲンの東海大学ヨーロッパ学術センターで、文明の諸問題について複合的な視点から意見交換を行うことを目的として、国際シンポジウム「日欧間の文明対話」を開催した。そこで、複合的な視点の一つとして提示されたのが、「文化心理学」であった。「文化心理学」とは、文化・社会的コンテクストのもとで機能する高次な心の機能－反省、創造性、想像力といった機能－を研究している学際的な心理学であり、その「文化心理学」の研究を推進するために設置された、世界で唯一の研究機関が、デンマークのオールボー大学文化心理学センターである。

文明研究所では、同センターから講師を招いて、2016年７月23日に、湘南校舎15号館４階第１会議室において国際教育センターとの共催で、文化心理学入門のためのワークショップを開催した。

ワークショップは、文明研究所の所員である田中彰吾現代教養センター教授の司会で進められた。まず、ヤーン・ヴァルシナー教授が「抑圧された志向性：行動の根本的な不確定性」というテーマで基調講演を行った。従来の実験心理学が、人間の行動について、原因と結果を結ぶ直線的な法則性をとらえようとするのに対して、人間は同じ刺激を与えても同じ反応はしないのであり、それぞれが記号を媒介として、過去の記憶をふりかえり、未来に向かって創造的な決断をしていることを強調した。

つづいて、同センターのルカ・タテオ准教授が「想像的過程と文化」というテーマで、演繹とも帰納とも異なる、想像力の発露の仕方についての講演をし、またジュゼッピーナ・マルシコ助教が「文化心理学における境界」というテーマで、「境界」がもつ意味を検討し、「境界」による内部と外部の差異化、内部の特権化とともに、「境界そのものの」がもつ革新性についての講演を行った。

その後、イタリア・サレント大学のセルジオ・サルヴァトーレ教授と教養学部の小貫大輔教授が登壇し、両氏による指定討論が行われ、時間の不可逆性をめぐって、活発な討論が行われた。また、会場からも文化と自然との関係や、自然科学的な人間像とは異なる文化心理学的な人間像などをめぐって意見が数多く出された。

今回の企画は、主な使用言語が英語であったことから、参加者数が危惧されたが、学内外の研究者、大学院生、本学の留学生など約40名が参加し、盛況であった。

なお、本企画は、田中彰吾教授の科研費プロジェクト「Embodied Human Scienceの構想と展開」の一部であり、『文明』第21号に田中教授による「不可逆な時間を生きる人間－「文化心理学ワークショップ」報告」が掲載されている。

プロジェクト協賛事業

平塚市民・大学交流事業　考古学の世界
『アンデス文明と土の象形』

吉田晃章

今年度のプロジェクトである「文明遺産をめぐる課題２」（プロジェクトリーダー：横山玲子教授）では、東海大学所蔵の考古遺物を利用した企画展示および遺物整理と文明の理論研究の二つの課題に取り組んでいる。本学は古代アンデスの遺物を所蔵しているが、今回は平塚市・大学交流事業において、コレクションへの理解と考古学への関心を喚起する目的で、展示および講演が行われた。この事業は大学と平塚市民の交流を図る目的で、平成23年から開催されており、これまで考古学科の教員が担当されていたが、今年度は研究所のプロジェクト協賛という形でアジア文明学科の山花京子先生（プロジェクト分担者）と吉田晃章（プロジェクト分担者）が担当し、2回の講座が開催された。

ここでは、吉田が担当した10月8日開催の講座『アンデス文明と土の象形－収蔵品にみる先住民の世界観－』について報告を行いたい。当日はあいにくの天候でありながら、平塚市民20名が参加された。講座では、まず東海大学アンデスコレクションの特徴や収蔵点数などについて紹介し、さらに標高によって異なるアンデスの自然環境について概観した。その後、多様な自然環境で栄えた諸文明の特徴的な土器について説明を行い、アンデス先住民の世界観が、どのように土器に表現されているのかをスライドを見ながら解説を行った。講演後は、あらかじめコレクションを展示しておいた教室に会場を移し、象形土器や織物、装身具など約30点を見学した。また一部の遺物に実際に触れて鑑賞していただいた。このため参加者からは、「貴重な遺物に触れることができて感動しました」とか「初心者でも楽しめました」といった感想が寄せられた。熱心に質問される様子が大変印象的であった。

今回の市民講座を通じ、今後もコレクションを有効に活用し、地域社会で文化事業を継続することが、コレクションや文化財への関心を高めるとともに、異文化理解を深めるためにも大切であることが認識された。また同時に、コレクションのデジタルデータベース化とその公開は、文明研究所にとって重要なプロジェクトであることが再確認された。

アンデスコレクション見学の様子
（撮影　平塚市教育委員会 川端清倫様）

国際シンポジウム
「第２回　日欧間の文明対話」
（2017年３月３日、４日）

2015年11月13日、14日に東海大学ヨーロッパ学術センター（デンマーク、コペンハーゲン）において、文明研究所およびヨーロッパ学術センターの共催で開催した国際シンポジウム「日欧間の文明対話」を継承して、「第２回　日欧間の文明対話」が、2017年３月３日、４日に、同じく文明研究所およびヨーロッパ学術センターの共催により、東海大学ヨーロッパ学術センターで開催された。これは、文明研究所のコア・プロジェクト「超領域人文学（Trans Disciplinary Humanities）構築に向けた基礎研究」（研究代表者：平野葉一文学部ヨーロッパ文明学科教授）の一環として開催されたシンポジウムで、20名が参加した。

主な内容は、３月３日の午前の部で、東海大学文学研究科の大学院生とオールボー大学の大学院生によるセミナーが、午後の部ではオールボー大学のヴァルシナー教授による基調講演「世界は１つ：人間としてのあり方に対する感情移入を通して」と、「個性・集合性と文化」をめぐるシンポジウムが行われた。また、４日午前に、ボン大学のパンツァー教授による基調講演「外国、その国の人々および文化をどうみるか。何が西洋におけるジャポニズムの理由であったのか？」と、「文明の通時性と共時性」に関するシンポジウムとが行われた。

本シンポジウムにおける報告などについては、次年度刊行の『文明』第22号に掲載の予定である。

『文明』第21号（2017年3月発刊）
内容のご紹介

巻頭言
・「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」展によせて
（沓澤宣賢）

論文
・元禄大地震と宝永富士山噴火　その2
ー相模国小田原藩領村々の年貢割付状分析から－
（馬場弘臣）
・An Aspect of Renaissance Mathe matics Reverled in a Study of the Theory of Human Prorportion
（Tomoko Nakamura）

研究ノート
・南フランス、ヴァール県南西部の4つのロマネスク聖堂について
ーラ・セルからシ=フールまでー
（中川久嗣・安達未菜）

報告
・不可逆な時間を生きる人間
ー「文化心理学ワークショップ」報告ー
（田中彰吾）

研究会報告
・20世紀人文学の方法論的再検討のための試論
ー歴史家黒羽清隆をてがかりとしてー
（山本和重）

所員の活動

山本　和重

文明研究所所長　文学部歴史学科日本史専攻・教授

【執筆・翻訳】

●「20世紀人文学の方法論的再検討のための試論ー歴史家黒羽清隆をてがかりとしてー」『文明』第21号（東海大学文明研究所）2017年３月

【報告・講演】

●「軍隊・戦争と地域社会ー鬼脇村役場の兵事書類についてー」北海道利尻富士町教育委員会，りぷらde学ぶ利尻学2016，2016年９月16日

沓澤　宣賢

現代教養センター・特任教授

【執筆・翻訳】

●「日本初の女医　おイネの生涯、そして謎」山陽放送学術文化財団『岡山蘭学の群像１』（p.13-34），吉備人出版，2016年４月

●「花嫁」（005）（006）～18-22，「旅姿の男」（024）（025）～57-60，「旅姿の娘」（028）p.65-66，「川越人足　雲竜の刺青」（057）～123-124，「川越人足　雷神の刺青」（058）～125-126，「川越人足　桜の刺青」（059）～127，小林淳一編『江戸時代人物画帳』，朝日新聞出版，2016年９月

●「シーボルト・コレクションからみえてくるもの」『歴史研究』第646号（p.8-9）2016年11月

●「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」展によせて」『文明』第21号巻頭言（東海大学文明研究所）2017年3月

【報告・講演】

●「シーボルト事件研究史概観」（＜日独シーボルト・シンポジウム2016＞没後150年記念 シーボルトの知的遺産と日独協力の新しい道）2016年10月11日，ＯＡＧハウス・ドイツ文化会館

【その他の活動】

●ラウンドテーブル・デスカッション「いわゆるシーボルト事件」（＜日独シーボルト・シンポジウム2016＞没後150年記念　シーボルトの知的遺産と日独協力の新しい道）司会，2016年10月11日，ＯＡＧハウス・ドイツ文化会館

田中　彰吾

現代教養センター・教授

【執筆・翻訳】

●「拡張した心を超えて」『人体科学』第25巻第１号（pp. 77-80），2016年5月

●『現象学的心理学への招待－理論から具体的技法まで』（ダレン・ラングドリッジ著，田中彰吾・渡辺恒夫・植田嘉好子共訳），新曜社，2016年7月

●「現象学と精神病理学」（トーマス・フックス著，田中彰吾訳）石原孝二・信原幸弘・糸川昌成編『精神医学の科学と哲学』所収，東京大学出版会，2016年8月

●「不可逆な時間を生きる人間－文化心理学ワークショップ報告」『文明』第21号（東海大学文明研究所）2017年3月

【報告・講演】

●「ミニマル・ナラティヴ・インタラクティヴ－自己を考える３つの観点」自他表象研究会にて講演（広島大学）2016年7月

●「Embodiment and interaction: Two moments of self-awareness」第31回国際心理学会議にてシンポジウム報告（パシフィコ横浜）2016年7月

●「Reconsidering the Self in Japanese Culture from an Embodied Perspective」第31回国際心理学会議にてシンポジウム報告（パシフィコ横浜）2016年7月

●「現象学の立場から」シンポジウム：基礎研究を臨床現場に伝える―認知・身体・運動研究の最前線にて指定討論（東京大学）2016年8月

●「Perception and Sensation: A Reply to Tom Sparrow's Text」国際ワークショップ：現象学と思弁的リアリズムにて指定討論（チェコ科学アカデミー哲学研究所）2016年11月

【その他の活動】

●第31回国際心理学会議にてシンポジウム「In Search of the Self」の企画および司会（パシフィコ横浜）2016年7月

●東海大学文明研究所主催「文化心理学ワークショップ」のオーガナイズおよび司会（東海大学）2016年7月

●エンボディード・アプローチ研究会および心の科学の基礎論研究会共催「ワークショップ：人間科学と現象学」のオーガナイズおよび司会（明治大学）2016年7月

横山　玲子

文学部アメリカ文明学科・教授

【その他の活動】

●文学部知のコスモス・パネル展示「マヤとエジプト～ピラミッドの謎」８月５日～９月７日，学術監修

●比較文明学会第34回大会「新しい「文化の都」構築に向けて」（同志社女子大学）11月5日・6日，実行委員として参加

平野　葉一

文学部ヨーロッパ文明学科・教授

【執筆・翻訳】

●平野葉一・元治千明「ドイツ実地調査報告ーミュンスター漆工芸博物館に所蔵されている模倣漆（japanning）ー」『東海大学紀要文学部』第105輯（東海大学文学部）2016年９月

●「四則演算記号の成立と計算の進化」『数理科学』2017年１月号（pp.7-14），サイエンス社

【報告・講演】

●“An essay on Trans-Disciplinary Humanities: As a key element for Civilization Dialogue”, Sei Watanabe & Yoichi Hirano, The 2nd Civilization Dialogue between Europe and Japan, March 3-4, 2017, Tokai University European Center (Denmark)

【その他の活動】

●平塚子ども大学「奏アカデミー」担当講師，平塚市・東海大学共催，2016年11月19日

馬場　弘臣

教育開発研究センター・教授

【執筆・翻訳】

●「コメント ミニシンポジウムによせて（特集 近世後期の言説と身体：言語論的転回のために）」『国史学』第219号（國學院大學文学部史学会）2016年６月

●「家格」「本家」「分家」「村絵図」「原」の項，『日本生活史辞典』吉川弘文館，2016年11月

●「元禄大地震と宝永富士山噴火 その２ー相模国小田原藩領村々の年貢割付状分析からー」『文明』第21号（東海大学文明研究所）2017年3月

【報告・講演】

●「神奈川県立公文書館古文書講座応用編 宝永の富士山噴火と相模の村々」講師（神奈川県立公文書館）2016年11月

●「朝鮮通信使：寛延使節への「馳走」と相模の村々」湘南日韓交流協会創立40周年記念講演（藤沢商工会館ミナパーク）2017年3月

【その他の活動】

●東海大学エクステンションセンター生涯講座

「古文書で辿る江戸時代の歴史」(ユニコムプラザさがみはら)2016年5月～6月，全5回

「古文書で辿る江戸時代の歴史２」(ユニコムプラザさがみはら)2016年10月～11月，全5回

●『東海大学資料叢書６　旧制東海大学設立認可申請書類（下）』（監修：学校法人東海大学望星学塾学園史資料センター）2017年3月

●パンフレット『朝鮮通信使が往く』(監修：湘南日韓交流協会）2017年3月

●ホームページの運営「情報史料学研究所」

http://www.ihmlab.net/

東海大学文明研究所所報 2016
発行人　山本和重
発行日　2017 年 3 月 31 日
発行所　東海大学文明研究所
神奈川県平塚市北金目 4-1-1　〒259-1292　tel:0463-58-1211 ext.4900～4902 fax:0463-50-2050